



中村俊定文庫
文庫 18
672



序

聞説と一寛政癸丑の卯月粟津に
義仲寺を造芭蕉翁に願正風太宗師と
いへる額浅やんとあり殿より下し終りて
ハ冬十月十二日翁の百回忌ありて誦道の
めいよく仰ても物ありあり交不武後れ我
摩訶山人も其流を業とせしむる年なりと日
門才社友小翁終焉のる異小發句を物語て



かれわやといひじ感る所あり小は久い出せ
句く百遠忌れも向々小奉らんと此は皆同
くろ小あり思さる寝敷れ論不及を書けら祈り小
序せよととむ諸君の微笑せんも道乃和哉
よろあひ且い追福れまろはし小つ多拙と耻と
大芝樓白酔書而

奉 芭蕉如来下

干時寛政五癸丑十月



祭文

惟時寛政癸丑十月十二日。佛祖芭蕉翁百遠忌謹て
香燭捧け時菓と備禿たる筆淡涼て。芭蕉翁の靈小
告く。嗚呼 老瑤山 壮年より。仇原小志をといへとも。
多病小して。河源と窮るる。つとみ以拙も。祖翁
高大れ徳業を量あるり。技桑玉中志る所。今文
のけるも於忍もあれと拙も。つとみ以拙も。祖翁
徳も思小。僕 九采の時實父義治小從以書肆
某れも小。傍小。つとみ以拙も。祖翁

終素記。其角書一文字あり。如あり菽素も毎さは小。
感通や有久落後せし。是も仇語不兆れといふる也。
それより十二罪れ去。湖十七文字とあり。父不語り
れば。父完爾として曰仇語も誦吾懲惡の一助。
まして和と尊とのみあるは。習俗れと。也は心も
け及の因と縁不也。去不ても二頃此田るは。は。
悠然と花と詠も。五斗れ禄おされ。怡然として
月不うかも。中身の以疑たる一念隠逸れ孫と成。
化の人なり。たの糧伐めら免ば。みづる口と糞とあり。

春秋のたつきと成て。尸位素餐れものともあり。は。
三十有餘年。高位貴人の山あふ不笑酒佳者と載り。
名山勝地小遊い。青樓戲場小たは終もろくは
雅吏とむつみ語らひ。兄のくく弟のくく。さ。さ
くゆるも。謀木やん君う代の悲澤。形俳祖の高徳。
先師先哲ればかり。有るさも泰さも。はなれ好士不
たがり。師とあり友とあり。是と同。彼と聴。後と
嵐雪れ三世蓼太。其角れ四世湖十不み。ゆるま
三と也。友不たわて。其角嵐雪両子れ傳書張る也。

口授口傳と訓誦シヤリ。中藏改陀の思シ。吉野鑑異
花紅紫。姨控文種ツキキの月雪。都の櫻小綿ハツキヨの奴ヌと
加ゆり。越後ツキキの雪吹フキキとツキキ。越中ツキキの麻父マウ尾張ツキキ也有。
修勢ツキキの二日坊フツキヨ大坂オオサカ小トホツキヨ居イし竹阿タケア。安藝ツキキ此コノ風律フウリツ筑ツキキ此
器水ツキキ。其外ツキキの事コトとツキキ結ツキキひ。さるツキキ中ナカ又マタの事コト
六ツキキ兵ヘイ山サン嶺リョウて。麻ツキキ信シン多タりツキキ。後枝ツキキ氏ウヂ宗ムネ仙セン
遊ユウ叢ソウ林リン樹ジュ一イツ向カウ。芭蕉ツキキ翁ウのツキキ志シ身シ路ロ通トウ。蕉翁ツキキより授ツキキとツキキ宗
傳書ツキキ傳ツキキ本ツキキ奧ツキキ秘ツキキの書ツキキ。後ツキキとツキキ譲ツキキらツキキとツキキ。漸ツキキくツキキ祖ツキキ翁ツキキの
一イツ關カンとツキキ透トウ一イツたりツキキと思ツキキふ。性ツキキ不ツキキ敏ツキキ一イツして。下ツキキのツキキ名ツキキさツキキ

さるツキキは。上ツキキのツキキ膝ツキキ下ツキキへツキキよりツキキ流ツキキるツキキ次ツキキ。されツキキも
道のツキキ買ツキキ加ツキキと思ツキキひ。牙ツキキ子ツキキとツキキ呼ツキキ列ツキキ者ツキキとツキキあツキキらツキキるツキキとツキキのツキキ撰ツキキ玉ツキキ路ツキキ通ツキキ。
克ツキキ人ツキキ名ツキキのツキキ名ツキキとツキキ物ツキキ器ツキキ器ツキキ量ツキキのツキキ者ツキキ不ツキキ以ツキキてツキキ得ツキキとツキキ
後枝ツキキ氏ウヂのツキキ建ツキキ言ツキキるツキキれツキキ、似ツキキけツキキかツキキたツキキれツキキとツキキ後ツキキのツキキ語ツキキとツキキ号ツキキのツキキ語ツキキ。芝ツキキ庭ツキキ。朝ツキキ叟ツキキ。人
珪山ツキキ。不幸ツキキ一イツしてツキキいツキキ四ツキキ人ツキキ早ツキキ世ツキキ一イツたりツキキ。其ツキキ外ツキキ近ツキキ里ツキキ遠ツキキ村ツキキ。
のツキキ事ツキキ不ツキキとツキキりツキキれツキキんツキキ。凡ツキキ千ツキキ有ツキキ余ツキキ人ツキキ不ツキキ。佛ツキキ語ツキキのツキキ事ツキキをツキキ道ツキキ導ツキキしツキキ。
全ツキキくツキキ名ツキキ圖ツキキ利ツキキ用ツキキ不ツキキあツキキらツキキずツキキとツキキ。只ツキキ芭蕉ツキキ翁ウ信シン心シンのツキキ外ツキキ化ツキキふツキキし。
けツキキだツキキしツキキ思ツキキひツキキ出ツキキづツキキ。びツキキうツキキ一イツ派ツキキ流ツキキのツキキ支ツキキ考ツキキ々ツキキ述ツキキ一イツとツキキ小。
とツキキろツキキかツキキやツキキ今ツキキもツキキ佛ツキキ語ツキキ。其ツキキ道ツキキをツキキ唐ツキキ虞ツキキれツキキ先ツキキ不ツキキこツキキかツキキまツキキて。
其ツキキ名ツキキをツキキ十ツキキ部ツキキ楚ツキキのツキキ後ツキキ不ツキキ取ツキキとツキキ。其ツキキ風ツキキをツキキ和ツキキ漢ツキキのツキキ一イツ派ツキキとツキキあツキキらツキキぬ。

況や其及小其法と定て。世情とわはかり教とわは。
滑コツ稽ケイ昔キれキるク。昔翁小傳りて。菱丞相の梅と捧て。
佛ブツ鑑カンのチヤウ禪ゼンと傳くツク。法然上人の菱ヒメ小伝て。
善導ゼンドウ此法と授ツク。古池の蛙カマド小自己コジ此
眼メと開ヒラて。風雅フウヤのチヤウ心シン及ツク又ツク乃ノ乃ノ人ニ。夜と天テンより
くクけケはハたタて。自ジ悟ゴとも自ジ證テイともいイのノ屋ヤきキあり。
貞徳テイトク貞室テイシツハ宗通ソウツウの名ナありて。只シ依イ證テイ此言語コトバと
傳ツクへレらレまス。真室マコ之ノや、吉野山ヨシノヤマの花ハナと詠ユ。
隅田川カサガハれレ多ク小吟コウして。其句コトバハ和奇ワキ此證テイ悟ゴ小かカへレは。

今イマれ風雅フウヤの根ネさス。其シ後ノチ難波ナニハ此宗コノソウ因ユハ。
武タケ城シロ下ノ小檀林コタンリンの額ガクありて。誹ヒ諧キ此コノ涅ネ負ヘを破ヤたスと。
耳ミミ小言コトバ語ゴのノ木キかカみミと得エて。眼メ小深シヤカ悟ゴれレ怖コソしシ成シ
まス。其シ法ホウをレ此コノ時トキを
其シ際サカイかカし。其シ師シかカ人ニ小はハ其シ身ミ子コもモとト元禄ゲンロク
寶永ホウエイのノ以ヨリまス。年月トキのノうウほホれレハ。いイよヨくク依イ證テイを
教ツクるル人ニあり。教ツクるル人ニ成シまスとト口授コウジュ傳ツクと
實人ジツジンあり。然シカらシれレ口授コウジュ傳ツクと。賣人ウリジンありシ也ナリあり。
及ツクの道ミチたる所トコロみミあり。賣物ウリモノはハいイつツもモあり。

かりを免のたふし。迷ふと悟るとは。一步千里の遠くあり
あはれは。昨を擇^{エラフ}履^レ此の大事あり。韓退之の言。人非生而
知之者。孰^カ能^ク無^ク惑^シ惑^シ而不^レ從^フ師^ニ。其^レ爲^ル惑^ス也。終^ニ
不^レ解^ル矣。生^レ乎^レ吾^レ後^ニ。其^レ聞^ク道^ヲ也。亦^レ先^ニ乎^レ吾^レ。吾^レ從^テ
師^ニ之^レ。昔^ニ師^ニ道^ヲ也。其^レの師^ニ思^フと思^ハは。茲^ニ小^シく
百^ニ遠^ニ忌^ムふ^ルありて。報^ル君^ニ法^ヲ會^ス。ゆ^レり^レく^レは^レ佛^士。
祖^ノ翁^ノよりなん^ク傳^レりし。口^ニ授^ク傳^レれ^ルち^レ歌^テ。法^ヲ會^レ
香^ヲ奠^ル。も^もか^した^レ此^ノの心^ヲ知^ルれ^ルと。も^もと^とり。口^ニ授^ク
口^ニ傳^ルを筆^ニ意^ニ示^スる^ルもの^ノあ^まきは。寸^ニ心^ニ屈^ク糸^ヲ。

胸^ヲ好^ムく^レ向^カり。只^ニ一^ニ句^ニれ^ルも^も向^カふ。門^ノ葉^ノれ^ルも^も免^ス。
一^ニ小^ニ冊^ニ次^ニを^レり。卷^ノ中^ニ小^ニ其^ノ心^ヲの^レ故^ヲた^つ故^ヲを^レり。是^レを
知^ル已^ニ同^ニ好^ムの^レ人^々へ^レ志^ヲを^レし^ル也。故^ノの^レ表^スも^もあ^はれ^ル也。
心^ヲを^レ終^ル。珪^ノ山^ノ又^ニ臟^ノ六^ノ腑^ノ。照^ル魔^ノ鏡^ノ不^レて^レ。今^ノ眼^ノが^レ鼻^ノの^レ
感^ヲを^レは。不^レ使^ルあり^しと^レれ。か^け終^ルも^もつ^まは^レ。古^ノの^レ語^ノ不^レ
言^ヲを^レは^レく^レを^レ厚^ク。情^ヲを^レ終^ルる^ル厚^ク。次^ノの^レて^レありて。一^ニ字^ニれ^ル
是^レも^も師^ノ之^レ階^ノあり。言^ヲを^レ引^ク不^レ終^ルし。亡^ノ人^ノの^レ向^クと^レ卷^ノ首^ノ不^レ
終^ル。其^レ去^ルる^ルも^も不^レ報^ル也。我^レ知^ル已^ニ社^ノ盟^ノれ^ル人^々く^レより。
終^ルり^し故^ノ。向^クと^レ終^ルる^ル也。是^レ法^ノ今^ノ曉^ル。芭^ノ蕉^ノ尊^ノ像^ノれ

前小のふらひて。芭蕉尊靈成祭る。尊靈胸中と
 祭りたり。あふれみ成たれて。六檀上小。靈魂翩然して。
 来郷食せん。花をささく。常任。紅紫をちぶく
 常任。南無芭蕉翁松青居士。南無芭蕉翁松青居士。
 仰冀三宝俯垂照鑑。

后学摩訶窻珪山敬白

寛政五歳次癸丑十月十二日

蕉門正風傳授れり。前後略撮て言ふ。長れい
 むう花のこふれりて。非代八雲此和奇をえん。代々
 和奇れ姿成る。其風神とてけり。六伽格を定まり。
 六伽と伽格を。餘の奇とかんりて。表小淡笑の姿を形し。
 裏小閑情の姿を形し。伽格の句を。上も小
 嘘とていふ。虚ハ虚あり。虚と実ハ虚ると是と虚
 実と虚ハ虚ると是と実と。實と實といひ。虚と虚と
 形とを。伽格此乃おあふと。正風を虚實の間小遊て。
 是も虚實小す。次。是我家此秘法也。下略

蕉門茶話傳といふ事

世もく何語の文字を。近世帝代所代古今集不出て。今此
何語といふ。後水尾院此所代。松永貞徳小花のものと誤りより。
何語といふのいってきたり。其以の何語といふを。言語にかみ
いふるなり。茲小寛文延寶此以。北村季吟子御歌學所小川町歷然
何語を貞徳より傳達
是と嘆して。何語も也。何語の。程口松化のともして。茶の代
張るまじ。萬代不易の姿とありたきとあるにて。松尾枕書芭蕉公羽
始の号之
山口素堂山口松尾側といふ儒者あり其は深川小ト若後不忠のなり小徑
墳墓ハ谷中感應寺小川の門黒黒處に建居一あり 何語を
茶の湯にておき。何語を説く。當時いひ控輕口地口のとてハ

張るまじ。詩奇此語傳小とて此評を立んば。松青先達と
あつる處。素堂湖春本寺吟子此實子
素堂小と傳及秋春 予と共く存撫を願ふ
何語の句いろく化り其中小

枯枝を集れ杖や秋のそ終

枯枝小集を何と終秋のそ終

枯枝下集のそよりり秋のそ終

い三句と評論して。集の杖やを曲るはさなり。集のれを
いと紫いひはめて余情なし。集のそよりり。是も秋のそ代
不易此語傳ありと。二人の眼眼より定り。何語といふを

蘇かすけり香れ遠里。服の句小口傳ある事あり。
今昔備々眷負御遊の濫歸根コシヒヤルと子也。枯枝小鳥の
こまりり里枝の言れ兼句あり。その處一故は遠路かよ
唐崎傳といふ事

唐崎此松を免より晴小て 翁

い句此る二十ふ糸も出たれと。二十糸本文をかりよてい
とくと解しけり所あり。傳三のハ。むうい句と。伏え此
門人。翁不同ふ翁言。人間眼おれ境との終い一ず。
唐崎春色がく調ひ。絶景の地をれは。死うもそに海
よりと。隠逸の志うり出て。石又定むらちの夢定あり。

い句或人其角小問。其角云。勝哉と云る魚れと。哉ハ句
切迫コシヒヤルの終はと答。又或人去来小問て曰。い句ハ才サイあふや。
去来云。是を即ソツキヤリカン真感偶マカンよて兼句たるる疑アタリ也。才ハ
句兼ふと云。其事翁聞流して。其去々キヨ并皆利屋
我者只。花より松の勝もて。面白かりしもののはい一
是高論小して初心聞得る所小つる也。又説。月花ツキハナ氣難
最上カクシヤクのりのあれ。花より勝哉とは。う。そんは成もあて。よと
志シ好コトををん。和奇ワキは片題ハタテ此褒貶ホウヘンのかれとと嫌きらふず。
仇諧キウハは利屋リヤさたるん小や。此眼コノメれ所トコロ小して解トクを魚イサ。

又之。哉。或。此。花。句。此。時。有。て。為。の。力。を。せ。ぬ。事。あり。と。其。角。り
難。決。集。小。の。り。不。て。は。哉。小。多。ふ。り。の。有。終。い。か。る。儲。平。句。有。は
唐。清。れ。世。を。春。の。歌。人。後。して。才。に。あ。れ。ハ。唐。清。れ。世。を
春。の。歌。賦。不。て。同。し。々。て。為。る。終。と。其。別。あり。彼。は。ま。の。う
一旦。豁。然。と。して。志。を。展。一。つ。を。う。一。つ。

虚実正と不事

虚実此るをを量小して。言は小又盡る。況や筆に
述るるのさされし。九牛の一毛。或はけしていへ。二十土系
虚実の段。本文小曰。万物を虚小居て實小働く。實小

虚小働く。虚小居る。次。譬。ハ。花。の。ち。方。は。か。あ。一。み。月。の。か。め。く。と
惜。も。實。小。た。一。む。を。連。哥。此。實。あり。虚。小。た。一。む。ハ。例。語。の
實。あり。と。友。小。奥。秘。を。説。人。よ。は。か。り。を。免。の。十。四。文。字。あ。り
論。さ。ん

金ちらむとも花ちらむとも一は連哥此實は

花ちらむとも金ちらむとも一は混金のとくはてをかりをかく

花ちらむとも金ちらむとも一は混金のとくはてをかりをかく
あれと。上公卿大夫より下庶人小至るまで。誰が實を假さるへ
例語の風流心也。璞。五。混金のとくはてをかりをかく

又句他りの大事小は

虚 糸をよみて雲とありたり風巾 是も虚小して也也

實 糸をよみて雲より落る風巾 是實小して實實は云

正 糸をよみて雲ともありを風巾 是虚實の果して也

發句附句とも小。句他の強をいふを懸念不修。芭蕉翁は

大漁或信心をもとむ。い虚實正此三字。三百六十骨節。八萬四千

毫竅或將て。通身より疑團成起。い三字小灸をよむ。

只無言利口少用るを。依竹附木の精靈之。而稽小つ。

規矩準繩れよ紀る成圓て。それ小柱楷や終。句此

出処人もた海月のあり。志下思るいさぐぬて。をあのあり
却てり。金屑貴しといふも眼小入て患とある此言也。
恐る魚しは。いむる魚しはか。

傳授書終

今もを。蕉翁を方此路通。常陸の國へ進行

鹿沼社へ糸指しはたれぬ。雲起り夕まして。後松丸の

家小雨やまり。一葉のたんさくれ發句因縁とあり。云と月

のあり暹多し。包物を介せけり。いづれともなくは云とあり。

具に鹿沼小て玉珠售くる。土地此屋おとあり。糸指の人

必焚る小あり。麻沓盃と号し其小。其盃の符絵小。香布と
松定例あり。香布を水中に懸る。松を後枝式に上此
香布をば。里人盃松と呼ぶ。年歴久し。安小にわて
路通へ盃松の榮句成えり。漸眼氣の朽く二句と書

題盃松 花柚哉松を湖水の以とあり 路通

麻沓を社路の禁。大舟津のわたり入江に湖あり。湖邊の松を
湖水を全くの盃にして。花柚を盃中へ懸し。柚を合と仰ぐ
希しく花柚の香を微妙あり。珪山より白仙等門人此
談語小。下のこあり小哉とて白仙と。向上異トふ上より

又せんとして。之小哉とある人あるもの。を未練レ明眼の前
耻かゝ起るあり。殊之小盃はあゝぬ。哉を。右海を盃と
是等コトも本とも盃と。三歎ト度くよして教爾トと

茲小七人の句。其一人の佳句を撰たる小あり。珪山面舎のあり。又此處ある文盃小聞。其時これ感有り。載る。香句は撰聚小あり。

南山風三廿く物さかたきくはあゆる月其角四世

賀

花の後実城調歌さくく南湖十

海上此子の雛ともんたり汐干風翠茶館

をみと川小て

ありありれ日や出以し都多越中 麻父

片上も上子小うた小田うくう南 伊勢 二日坊

猪首川

たまのりてもあつて嬉しなとき次 尾張 七有

細魚しそ氣のあいなやあしし此兒 安藝 風律

ちうくと風不脚あり麦をさけ 筑前 水

月の氷千鳥此啼思てもありあり 大坂 竹阿

和明小深也く雪の山路の南 其角 湖十

雲法かむ男さかりや最土詣 後 秋色

たの川鯉牛此口と用人や 後 撰玉

月小ちち花も一里人ととり哉 後 路通

年此尾小とと巻付人屠蕪袋 芝庭

お母のあやや節小舞小月せり 朝叟

船影や傘抱て出る小役人 松隣

あ仙やうろ小多死顔あし 志席

昼か海や汗不枯る摺小舟 女 杜涼

幸いそく氣色もふくむ三保の松 聰雨

時江やあまがとくま次く 猿蓑

門たぐく伯母おかくまや一物類 書堂

あつも色と此人小老あつとと梧涼 吾游

志の免此さくく強しをぬふたり 連丈

淡雪や湯の月く山此井の處

馬卯

菊さくや道春點乃古襖

梅

色屋くく丸印と老若か春の雨

女
洗車

蝸牛是る紅葉く庭の玉子と川

野列
松齋

右二十七句亡人此雅名拾香と唱終

右一筆蕉翁尊像安座一より予々
竹をまひ此居修り此時助力不詳くこれ
白と載ていふ其芳志不類 言葉書各略

三おとハ小月此やとるや一松の居

古用

其人此もおと又くり居の月

楚江

あよろくと昇るや落此居坐る

規鳩

雪も雪あろ此花小居の月

五多

執事此小奥も逃くさう物

白川

さくハ小被の漂か今節の株

白馬

籠る此居梅わろくとちり日哉

振響

降り死花や喜至此かとい星

叙
魯石

竿やかくれさくせて竹小成

芦水

かゝる毒小生れ合てさくくの南

蘭茂

端端や跡の使れ喜魚死魚

野列
曾六

七竹や操索の卯若浪の吉

珪竇

一會忌

茶の花小ふくれおちてくま	蚯候
芭蕉忌や百俵施され炭たき	花口
百年此ま白やりの霊あはり	五口
百年の時西流とりて木魚哉	東白
古流小蛙眼をまろ小春う南	龜川
其春此色香也ゆり一帯り危	曲哉
枯枝ふあられこまりり袖一終	文哉
いせ強忌や百合もあうらう	一方
百とせれゆり一五忌の小雨哉	如水

深川や蛙のうたも小春風	大哉
散流て流小冬此をみち哉	一行
那郭小ニ交束の夏れ時夏哉	海春
百とせの時夏忘たあや風流の友	赤哉
百とせも朽也其名や時夏月	子礼
十をうし此流をいぬるし	左琴
枯野もく夏も續や百回忌	冬餅
優曇華や百年ゆり此時危	千崔
もせ強忌や跟を破る信此候	狂丸
時雨泣猫も小養此悲か	魚藻

八尾此ある此よし一尾よ梅ふと木 白醉
 虫干やあくる此座の七歌集
 枯枝小秋のいろあり集 凡
 志らくやあらしの音此捨 笠
 うさひとも梅小来啼や万於経 九鳥
 みおのりと名伴あふりとお梅言清水
 名月やよせ坂のそ夜も又六合
 深川や秋場此のそり小啼あふ
 梅うぶる難波のたよりきく日哉 女、多み
 一河より一樹の陰や菱柳

春ついでや志賀の隣此初歌
 百とせ此をいしお福くや枯尾花
 眼おかくる席此乾葉や梅此花 器水
 なくさう次啼や玉のくまもさう終
 玉川や月の中をいしさうし 白
 枕さうさう咲や小春の魂をかひ 女、魚井
 ちく居や望田をきき春の風
 又月雨や銚河つまる粟津寺
 名月や江ぬりくくる瀬田の橋
 唐詩や雲もお母ろ小春風

ちるまで残らんとは極北の原哉 要里
 白川や白紙の存く秋の風
 喜原のてる枝おこふ此死
 うひもや岩るともまゐるの言 如蛟
 二言あはれ氣丈も蓮の如く哉
 名月や雨のるく此一里塚
 水仙や氣あふ小咲て海近
 春風や雀子とよく麦二寸 古隆
 秋津洲をわらむ葵の如く哉

水影此原の後又る月夜哉
 活の出る蚊を耳よりや小六月 冬餅
 夕まかりまを野不離子の入日哉
 浪人此た免しふらこ首の輪は
 竹市や杵をる影の回此門掃除
 大くくくやまの裏返を次戸簾
 動くくくで又る影もあふおほる月 湖光
 裸身小大の影浴ん夏の月
 歳をくく小ぬを又よく持垂れ
 身仙や旭不柔のなと柔

阿けぢのままおとの春花月日貝 鉦候
 濁江此それとはるぬ曇う南
 直あどふ霧や首途の大音毛
 ちうくと千鳥聞もる落葉哉
 百とせ此春残二そや柳う死 加升
 持もや春庭小のせてまの曇
 自向んと初草捨か捨 々々
 古池の影もきく冬の月
 鶴坪へさくちりく山落哉 翠霞
 小坊に此夜おつ、お曇の南

遠奈の報て月けゆく秋野哉
 入取お公とむき黒き千鳥哉
 うらひものお又陣まぬ都う南 一行
 里をく照射を峯此小陰より
 新きりや馬のいあく冬一里塚
 新下小鶏淋し初しるき
 去あうら曆もアんさー二日矣 典皎
 啼初て毛膜色のあしちき決
 初秋やふそか小志くむ桐の園
 一輪此日新しきく冬牡丹

早蕨や如素庵せしを春草と
 野主
 鶏も時ふらいたり 桐北をふ
 啼麻北をのり 欲哉志ふひたり
 常の日や平砂小鷲の人をり
 菜の花や蝶のまえゆく入日影 一方
 をのつららる自残ついでる牡丹哉
 山麓つかくして戻を吾北海
 足跡の男をいやー園の雪
 猿人北笠脱せりり夕雲雀
 路半
 松陰や涼しき削る蟬の足

鶴北菓の糸ふちうらや今朝の秋
 蘇てを羨さうて此ふやく此市
 村笠ふさうう哉志のく女う南
 東郊
 八月雨や吾北馬鹿ふむーの歌
 歌下〜や人おといせ此鐘をとい
 ふ何ゆりや又又いあまの並所
 吸ふ小魚るあふいそし苗代田 千雀
 香張志つめく牡丹の志を哉
 衣をく〜志め〜て吾北ゆく傍哉
 大根の輪切ふさくや柔の音

吹れく元船此葉小胡蝶の南初音丘 算水
 見えかきお天垂掬たり初雲魚
 唱子くくぬるひ出たり村雀
 枯果一野川小鴨の夢紫哉
 砂浜や鵜の踊るる此風 倉河隣 不玉
 弘法の硯ふるみし落る哉
 森て葎かりを造人星よみ
 吹寄て千鳥とありぬいさり松
 言やも死日と思ひたり山さくら
八雲店 狸丸
 朔日や半と云坂の初と、き次

名月や誰いひとめさかられ里、
 志ろ名や墨股川の船あけ、
 雉子の脊おろりと落る椿哉 益良
 浮むし此お文字かくま田哉、
 何しひ忌の給はれたし秋の風、
 在る夏此みそれとあるや今秋の雪、
 多ふとを濁さぬおの 蛙の南 娥婦人 真澄
 鏡花や明石の巻小山かつら、
 襦袢や土器とてもと此土、
 志ろくや町中存おと川松、

父母と并んで見たら山さくら
何時しも今朝の嚏をなとくき次
名月や川上小機此言
起く此雪大名と成ふりり

玄冬一國日

禁して所れを大抵あるは枯野原 筑水
百とせ此色を塔りり冬紅紫 船賀
芭蕉忌や群る小春此百千言 画童
百とせ小とくれ何ふみの志を道哉 東林
百年忌しこれのほか墨也し 真澄

芭蕉忌や年未たきまりの中 壤哥
百とせのなみふれりふ此夕時雨 野主
くせ哉忌や種も百種の帰る候 立早
芭蕉忌や白ふるかさうく小秋時雨 龜石
一五人を志たふ胡蝶や冬牡丹 東誌
くせ哉葉や居る秋哉つ指どとは 梅七
四季混交
高さ家小登りはいか小致を竹 吳牛
六月雨や日かくぬとる秋の音 李仲
新影や妹くかくるのくく表 一行

三粒	初もの	なれる	志	松陽
聖哉	ふとは	はる	ぬ	井
七小町	折	雨の	田	昭子
駒	さめて	野中の	清水	路牛
水牯	の	流	哉	登列
又	る	ち	不	東
花	と	の	裁	文
志	ま	井	と	東
以	の	針	治	青
子	成	捨	る	井
				花

園	字	て	木	の	石	碑	小	東
吹	さ	ら	も	峯	此	帯	や	惟
香	井	や	瘦	て	も	雪	の	東
明	六	つ	と	は	毒	の	瘡	珪
文	城	野	の	萩	小	居	た	急
授	安	や	む	か	を	思	ふ	春
玉	川	小	編	音	く	拍	子	桂
碧	巖	の	一	則	の	木	る	壮
又	月	雨	や	三	つ	四	つ	桂
								江

遠境書音

夏さめてゆえ百とせ此枯也哉 野列麻沼 檜英
 冬も鳴く虫も降りたり翁此日 女 鳳羽
 合歡此紫の夏も夏たり夏の月 素琴
 茶の花此あゝ小日向や翁の日 眠我
 日向り百年の名も降り死 紫桂
 百年此時取小打ぬ 檜 笠 蘆舟
 思ひ出して鳴や千巻も百年忌 堯里
 さし啼も日向の敷や百年忌 其友
 百年此とえを語や枯尾花 保雪
 消残る名此也しよ墓の雪 日光板橋 耳風

日向もや細尾の名も枯残り タケシ 保雨
 月花も今優曇華の也かり哉 岨月
 念佛てたゞ々納豆や百年忌 岩碕 近交
 百年此曇きいつふ冬此月 永細 旭遊
 消燃名の朝日も近一塚の霜 遊林
 粟津野や柔もも枯も芭蕉塚 秋 山登
 百とせ小降り花さく翁の菊 朽木 五明
 百年のむくも新や枯尾花 塞驢
 えや城忌や煙流りりて百竹柔 雷車
 のり来る香や百年此降り死 魚侯

山星名明ても 楸一麻 此路 山田 文考
雲や月く山の腰くちき次 不説
月花の種やせもく塚の雪 麻沼 松哉
芭蕉忌や言もせて 咲枇杷此花 信列 素筍
たせ忌やあろ此花の歳も向 玉苫
芭蕉忌やりふ百年此帰り花 東水
しつ吾や酒暖もれハ消てゆく 片倉 仙丈
花よりも岩山よへる 白紫哉 春日 玉線
しせ城忌や玄紫の竹此帰り花 新田 竹甫
なつくこれいかりを 訪はかなき 野列 季友

是やあゝの松を 往東此くれ哉 稻曠
志くくやむくこれあゝ 不濡伝 原芝
百年此数や 落葉残塚此あゝ 圓水
芭蕉忌や 立苑不替く水の言 信陽 胤友
くせ城忌や 真子さゝ 卯の十二日 冬水
ふゆももさゝ 小芭蕉のくれい 倉河隣 不玉
石小やともかけを けり 穽月 潺居 董川
大坂
凡るや 誰在を 葦此 熟みとり 不二唐 挑居
大寺の 灯を かりそめ 不踊る 吞秋 楠芽

さむしろや伏猪の中此きりくも 八千坊 陀岳
 うも芳此終小言し秋此雨 半桂唐 月居
 友とせし花何く也秋此蟻 大江隣中 山曉
 幸流此松のまろや天の川 羨山
 ほしきくむ核の指やま川何じ 芦邑
 雨の日や我身ふと何此角力取 麴之
 風雲のちききくくてさ終菽 臺儿
 横槌乃落置かろく轉ひたり 吳郷
 大菊浅雨小かさ人春日 山 萬子
 流ぬし水や養此流く出も秋の雨 千柳

かなし此智恵まかると也菽此かせ 石田
 紫蕨此実のむろさ此林し秋此風 大江隣 旧國

三千大千世叟

爲一佛土

櫓の舞や芭蕉此百年忌 珪山
 小春此花小香のか常流小 白醉
 峯此塔氣高く標枝たきて 九鳥
 たまひてゑる人よてををし 山
 の塵ほし小日此著てゆく月太ふ 醉
 片よやてそく蘭乃評極 鳥

使者此間不折脚（一）と乃於扇
 若流尺かけてみくいとハ裏
 さお水やとと約此舟りよひ
 紫陽花やうく入梅の晴天
 角兵衛此梅子哉吉例小村祭
 笑ひ上戸此腮やまらきん
 桜桐帚まれハ大ろ娘月文て
 化りの沙汰も福系此秋
 お撲取めいこくさうふかふまう
 か〜の利と膳小折箸

鳥 山 醉 鳥 山 醉 鳥 山 醉 鳥 山 醉

ぢ〜やぬけ風此胡蝶と山さくら
 田井も優分由公家飲分
 片爪を脱て公かん此立佛
 瑠宇普流て呼登の兵糧
 異妻小加田をうろみ此浪も道
 人間萬事塞翁此意
 世の中をぬる死吾小なとき次
 煤も持た〜餅もつきた〜
 子たか〜残あ〜辱て俄分限あり
 日七かくや々と陀阿の十念

鳥 山 醉 鳥 山 醉 鳥 山 醉 鳥 山 醉

志々踏も三枝小雲此玉さか山
 物と入る小浪札て賞 醉
 想々雨此立派小濡る袖乃月 鳥
 冬待か福てとやい口切 山
 咲礼を兼女席花土色萩
 の流はく半小馬此祭明 醉
 市中此天辺ん棒々鼻へ抱も 鳥
 日和の鐘此おんと聞へる 山
 道の祖へさける花を枝をさる 醉
 四海ゆとわか小足才此春 執筆

跋

摩訶憲乃りり〜 璉子 芭蕉翁

〴〵〴〵の志をい少々おや〜 西土教之徒
 御名汝唱へ〜 若あ〜 若子士子
 告〜 〴〵の靈魂乃〜 若あ〜 若子士子の
 俳諧七五のふ〜 〴〵と求〜 〴〵
 詞乃〜 〴〵爛熳〜 〴〵若梅子

香を以て其枇杷の香乃異香意一
後城公后處子能力に巻とある
児孫の管絃のしりしりとなりて
美部の法事うもりてさくらむゆ
百味乃供物おもとらりて

寛政癸丑陽

三月五日

笕水

摩訶窗俳書目録 東都書林

東叡山下竹町

花屋久次郎

俳諧古事談

俳諧古事
古語のそり
やうと記す

瓜乃蔓

三杵撰

江戸返事

三杵撰

年八卦

志席撰

秋興八歌仙

吏鳥撰

喜世和多

栗把撰

鸚鵡百題集

古人の首句を
書家百全集

藤拵折

を以て塚
造立餘音

發句いろは

古人の詞を
発句のいろは
初めのいろは

二才準繩

其角嵐雪
附合傳本

摩訶窗俳書目録

歷代詩話卷之五

俳諧大通事

樂府題詩
卷之五
附錄漢和百韻

長真蔗夜話

眼藏撰

かく秘之河

眼藏撰

駒牽集

信陽屋月
素笥藏

芭蕉翁百回忌追福
百轉集

千種
狸九纂

[Blank page with faint blue grid lines]

